金花は〈神聖〉なのか

——芥川龍之介「南京の基督」試論——

王　菁　潔

はじめに

芥川龍之介の「南京の基督」は彼の中国旅行以前の作品で、大正九年七月に『中央公論』に掲載された。実際の体験に基づいたものではなく、文末の付記によれば、友人の谷崎潤一郎の「秦淮の夜」に啓発された作品である。「秦淮の夜」では主人公の日本人は南京で享楽的官能的な旅を求めて、案内者と秦淮で芸者を探しに行くなか、二人の芸者を見て、とうとう素人の芸者である花月楼のところにたどり着き、彼女の可憐な様子に感動を覚えたと描かれている。中国での見聞を生かした、異国の情緒が溢れる作品である。「南京の基督」では、南京を舞台に、ローマカトリック教の信者である素人の娼婦金花は楊梅瘡（梅毒）にかかってしまい、外国人の客と一夜して病状が収まったことから、その客は基督だと信じる。しかし、金花を訪れた日本の旅行家はその外国人はただの無頼漢で、梅毒で発狂したと知っていた。そのことを金花に知らせるか否か躊躇したというのが大筋である。

作品の発表後、南部修太郎の「作者に心の動きがない」という評に対して、芥川は結末の「日本の旅行家が金花に真理を告げ得ない心もち」は「僕等作家が人生からOdious truthを掴んだ場合その暴露に躊躇する気もち」は同じだと反論した。先行論はこの芥川の書簡を土台に、日本の旅行家と作者との心境を重ねた解釈が行われている。例えば、関口安義は金花を〈神聖な愚人〉とし、彼女の「愚直な、それゆえに信じやすい魂のもつ強さ、その壮烈な生き方に語り手、そして彼を統御する作者は驚き、あこがれを感じているのである」と指摘している。[1]

しかし、芥川が書簡の中で言及しているのは作者の心の動きの問題であり、南部への反論である。それは作品のテーマであるとは言っていない。そこで、外部の事情はさておき、本論は作品の内部から分析を行う。陳諭林氏は語り手について、「日本人旅行家の「私」という一人称の視点で書かれた「秦淮の夜」に対して、「南京の基督」では語り手が第三者の立場から中国人娼婦宋金花に寄り添う視点で語られ、最後の日本人旅行家の登場が金花中心の物語を覆す構造が取られている」と指摘している。[2] 確かに語りの視点は一定しておらず、分析する必要がある。しかし、詳しく見てみると、金花の視点で語る部分は限られており、例えば、「金花は思はず立ち上つて、この見慣れない外国人の姿へ、呆気にとられた視線を投げた」の一段落は金花の視点で語られた外国人の姿である。多くは第三人称の

語り手は自らの立場で語っている。作品中推量の意味をする「さう」「やう」等がよく使われ、登場人物と距離を置いて語られる。また、「――さう云へば今年の春」のように、語り手の存在が明らかな部分もある。このように語り手の視点にも注意が必要である。

本論は作品の解釈を目的とする。特に語り手に注目して、語り手はどのように語っているかを探ってみたい。

一

初出において作品は直線によって三つの部分に区切られている。第一部分は「或秋の夜半」金花が外国人の男を接待するまでであり、第二部分は眠った時金花の夢と彼女が目覚めた後の内容であり、第三部分は日本の旅行家が再び訪れる部分である。本論はそれに従って三章に分けて論じたい。

第一章では「或秋の夜半」の出来事が語られるが、その間に金花の紹介、日本の旅行家との初回の出会いや金花が梅毒に罹ったことが挿入されている。まずこれらを検討したい。金花の優しさは「勿論彼女が生れつきにも、拠つてゐるのに違ひなかつた」と語り手が前に出てコメントをしている。そこでもう一つの理由を「金花が子供の時から、壁の上の十字架が示す通り、歿くなつた母親に教へられた、羅馬加特力教の信仰をずつと持ち続けてゐるからであつた」と語っている。ローマカトリック教は末日の審判を信仰しており、キリストへの信仰を持つ、且つ良い行いをする人は、天国に行くことができ、反対に地獄に落ちることになる。そうすると、「私窩子」つまり私娼をやっている金花は良い行いをしているとは言えない。若い日本の旅行家はその疑問を発した。

「秦淮の夜」において日本人は中国語を話せないが、本作においては「覚束ない支那語」で金花と話を交わすことができる設定となっている。キリスト教徒なのに売笑婦をする金花を皮肉に問い詰めることに対して、金花は年老いた父親と自分を養うためだと弁解した。そして「こんな稼業をしてゐたのでは、天国に行かれないと思やしないか」と再び追い込まれると、金花は「考深さうな眼つきにな」り、「天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから」天国に行けると信じ込んでいる。それを聞いた若い日本の旅行家は「微笑し」て、お土産として買っておいた翡翠の耳環を金花にやった。つまり若い日本の旅行家は金花の弁解に納得できた。ここに注意したいのは、語り手は推量を表す「やう」、「さう」を使って、距離を置いてこのエピソードを語っている。そのあとこういう風にまとめている。

金花は始めて客をとつた夜から、実際かう云ふ確信に自ら安んじてゐたのであつた。

「かう云ふ確信」とは、売笑婦をしていても、それは父親と自分を養うためだから、基督様は理解してくれるし、よくよくは天国に行けるという考えである。語り手はこれで金花が安心しているとして見ている。つまり、自分の行動を正当化するための考えだと見抜いている。このエピソードから、金花の自己弁解に日本の旅行家は同情を示す一方、語り手は冷静な目線で金花を見ていることが分かる。

そして金花は梅毒に罹ってしまい、他の売笑婦から病気を客に移せば治るという方法を聞いた。語り手は「迷信じみた」療法だと承知しているが、十五歳の売笑婦金花にはもっともらしく聞こえた。というのは、彼女は祈祷のなかに、「唯今の私は、御客にこの病を移さない限り、今までのやうな商売を致して参る事は出来ません」と言っているからである。しかし、客に病気を移す行為は言うまでもなく、彼女の信仰に反することであり、天国に行けなくなるのである。そこで、金花は病気を治すこと、つまりお客に病気を移すことを誘惑だと考え、それに陥らないよう客を取らずにいた。そのけなげな決心によって、金花は何度も客を拒んできた。語り手は金花の境遇について以下のように語っている。

だから客は彼女の部屋には、おひおひ遊びに来ないやうになつた。と同時に又彼女の家計も、一日毎に苦しくなつて行つた。

……

このように、その秋の夜半を迎えるまで、金花は病死と餓死と二重の恐怖に直面していた。

次に、語り手はその秋の夜半のことを再び語りだした。ここにおいても語りに注目したい。特に同じ場面で語り手の視点と金花の視点が交互に出現する特徴的な語りがなされている。そして、外国人の客については、内面的な描写が空白になっている。結末部に、若い日本の旅行家はその外国人を「無頼な」男としている。では、その前に外国人は始終基督のような立派な男として語られているか否かに注目したい。

金花は思はず立ち上つて、この見慣れない外国人の姿へ、呆気にとられた視線を投げた。客の年頃は三十五六でもあらうか。縞目のあるらしい茶の背広に、同じ巾地の鳥打帽をかぶつた、眼の大きい、顋髯のある、頬の日に焼けた男であつた。が、唯一つ合点の行かない事には、外国人には違ひないにしても、西洋人か東洋人か、奇体にその見分けがつかなかつた。それが黒い髪の毛を帽の下からはみ出させて、火の消えたパイプを啣へながら、戸口に立ち塞つてゐる有様は、どう見ても泥酔した通行人が戸まどひでもしたらしく思はれるのであつた。

この部分は金花の視点で語られている。これによれば、外国人が部屋に入ったばかりの時点で、金花は彼を戸惑った通行人としか思わなかった。語り手も金花は「無気味」な感じを覚えたと語っている。しかも外国人は「支那語はわからない」ため、意思疎通ができないわけである。しかし、次の段落から、語り手は外国人が「客」であることを示した。

客は彼女が当惑らしく、美しい眉をひそめたのを見ると、突然大声に笑ひながら、無造作に鳥打帽を脱ぎ離して、よろよろこちらへ歩み寄つた。さうして卓の向うの椅子へ、腰が抜けたやうに尻を下した。金花はこの時この外国人の顔が、何時何処と云ふ記憶はないにしても、確に見覚えがあるやうな、一種の親しみを感じ出した。

語り手だけでなく、金花も外国人が座った行為から、彼は通行人ではなく、客であることを意識できた。そこで、「一種の親しみを感じ出した」と語られる。この「親しみ」の感じはこの後何回も繰り返し語られるが、一回目のほうが重要に思われる。何故客だと分か

った時点で「不気味」から「親しみ」へ転じたでしょうか。

そして金花は外国人の客を目の前に「愛想の好い微笑を見せながら、相手には全然通じない冗談などを云ひ始めた」と客を接待し始めた。祈祷の中で客に病を移すまいと決心した金花は、客だと分かった時点で断ればよいのだが、「殆習慣になつてゐる」接客を始めた。金花は無意識に客を取ろうとしたのではないだろうか。つまりこの外国人の客を見て病気を客に移せば治る誘惑に知らずに陥ってしまったのである。客の様子について、以下のように語り手と金花との視点よりそれぞれ語られている。

客の吐く息は酒臭かつた。しかしその陶然と赤くなつた顔は、この索寞とした部屋の空気が、明くなるかと思ふ程、男らしい活力に溢れてゐた。少くともそれは金花にとつては、日頃見慣れてゐる南京の同国人は云ふまでもなく、今まで彼女が見た事のある、どんな東洋西洋の外国人よりも立派であつた。

客は泥酔した。しかし、金花にとって今まで見た人のなかで最も立派である。語り手は酒臭いと指摘しつつも、金花に同調して「男らしい活力に溢れてゐた」と積極的に評価している。この部分より、語り手は金花と「共犯者」の関係を結んでいることが認められる。

次の部分は完全に語り手の視点から語られている。客はいよいよ指で値段交渉をし始めた。言葉が通じないため金花はジェスチャーで返答するしかない。「客を泊めない」金花は「否と云ふ印に二度ばかり」「振つて見せた」が、「器用に西瓜の種を鳴らして」、「笑ひ顔」に伴っていたと語られている。これは値段に不満足という意味を客に捉えられてもおかしくないボディー・ランゲージであろう。事実客はさらに高い値段を出した。金花は「今更のやうに、彼女の軽率を後悔し」たが、その軽率な態度は前文の「愛想の好い微笑」で接客するのと同じように、客を断っていないことを示している。語り手は金花の内面を語っていないため、金花はどのような心境で客を誤解させるような仕草をしたのかは分からない。

その後金花は基督に祈祷した決心を守るべく、頭を振り続けるが、落ちてしまった十字架を拾う時、

何気なく十字架に彫られた、受難の基督の顔を見ると、不思議にもそれが卓の向うの、外国人の顔と生き写しであつた。「何でも何処かで見たやうだと思つたのは、この基督様の御顔だつたのだ。」

金花は断ることに必死になっていた時、客の基督に似ていることを発見したわけである。これによって金花は基督の降臨だと思い込むようになる。しかし、冒頭に語り手が語ったようにそれは「小さな」十字架であり、十字架の上にある受難の基督は「稚拙」で、「手ずれた浮き彫の輪廓」になっている。そうすると基督像の顔はくっきり見えないはずである。一体金花はどのようにこの十字架の基督と外国人の客の顔と重ねられたか、読者に疑問を生じないわけにはいかない。

客を基督だと思い込む金花は続けて、次のように客を見た。

金花は黒繻子の上衣の胸に、真鍮の十字架を押し当てた儘、卓を隔てた客の顔へ、思はず驚きの視線を投げた。客はやはりランプの光に、酒気を帯びた顔を火照らせながら、時々パイプの煙を吐いては、意味ありげな微笑を浮べてゐた。しかもその

眼は彼女の姿へ、――恐らくは白い頸すぢから、翡翠の環を下げた耳のあたりへ、絶えずさまよつてゐるらしかつた。しかしかう云ふ客の容子も、金花には優しい一種の威厳に、充ち満ちてゐるかのやうな心もちがした。

「思はず驚きの視線を投げた」とあるように、傍線部は金花の視点になる。金花は客の好色の様子を目でとらえている。まさに若い日本の旅行家が言った「無頼な」男のイメージと重なっている。それにも関わらず、基督に相応しい「優しい一種の威厳」を感じた。この語りの部分から、金花はいかに外国人の客を基督だと自分自身を説得し、あるいは騙そうとしているかが、はっきり見えてくる。語り手はこのように金花の客を基督だと思い込む無意識を晒している。カトリック教徒である金花は、決して病気を客に移すまねをしないと決心したが、一向回復しない病状と日に日に貧しくなって行く状況に陥っている。その外国人の客は基督だとすれば、救助しにきたため、拒む必要がなくなったろう。無意識のうちに金花は都合の良い解釈をしてしまったのである。

そして金花はこの外国人の客を拒まなくなった。客を取らない決心も忘れて、抱かれてしまった。

金花はまるで喪心したやうに、翡翠の耳環の下がつた頭をぐつたりと後へ仰向けた儘、しかし蒼白い頬の底には、鮮な血の色を仄めかせて、鼻の先に迫つた彼の顔へ、恍惚としたうす眼を注いでゐた。この不思議な外国人に、彼女の体を自由にさせるか、それとも病を移さない為に、彼の接吻を刎ねつけるか、そんな思慮をめぐらす余裕は、勿論何処にも見当らなかつた。金花は髯だらけな客の口に、彼女の口を任せながら、唯燃えるやうな恋愛の歓喜が、始めて知つた恋愛の歓喜が、激しく彼女の胸もとへ、突き上げて来るのを知るばかりであつた。……

傍線部は「秦淮の夜」をパロディーしたものである。

「花月楼、花月楼」

と、私は纔かに彼女の名前を支那音で呼び続けつゝ、両手の間に細長い顔を抱き挟んだ。挟んで見ると掌の中にすつぽり隠れてしまふほどな小さな愛らしい顔であつた。力を籠めてぎゆつと圧したらば、壊れてしまひさうな柔らかな骨組であつた。大人のやうに整つた、赤児のやうに生々しい目鼻立ちであると私は思つた。私は急に、挟んだ顔をいつまでも放したくないやうな、激しい情緒の胸に突き上げて来るのを覚えた。(3)

「秦淮の夜」における日本人は素人の売笑婦の可憐なる姿に感動を思えた。芥川はその部分をもじって基督だと思い込んだ客に抱かれて金花は「恋愛の歓喜」を覚えたと描いている。しかし、金花のそれは無意識のうちでも病気が治る喜びにすぎないといえよう。このような語りによって、エゴが露呈された金花は勿論、もの好きな一夜を過ごした「秦淮の夜」における日本人まで揶揄されている。

また、語り手はここにおいて、客を「不思議な外国人」としている。泥酔した好色な男だと承知しつつも、若い日本の旅行家のように、「無頼」という判断を避け、金花が客を基督と思い込むよう、あえて言葉を濁している。

第一章を詳しく分析してきた。金花は何も知らずに客を基督と見てしまったのではなく、病死と餓死に追い込まれる逆境の中で外国

人の客を見て、泥酔した好色な男にもかかわらず、基督に見えてしまったのである。

二

第二章は金花の夢と彼女が目覚めた後の内容からなる。まず金花の夢を見てみよう。夢というのは現実離れなもので、時には人間の心象風景でもある。彼女の夢の中に「燕の巣、鮫の鰭、蒸した卵、燻した鯉、豚の丸煮、海参の羹」等、ご馳走が目の前にたくさん並べられている。先述した通り、金花は病気を抱えて、且つ客を取らないと決心したため、病死と餓死に直面していた。夢の中の食べきれない程のご馳走は、まさに彼女の餓死したくない願望の表れであろう。そのことが次の部分においてもよく語られている。

それにも関らず卓の上には、食器が一つからになると、忽ち何処からか新しい料理が、暖な香気を漲らせて、彼女の眼の前へ運ばれて来た。と思ふと又箸をつけない内に、丸焼きの雉なぞが羽搏きをして紹興酒の瓶を倒しながら、部屋の天井へばたばたと、舞ひ上つてしまふ事もあつた。

料理が次から次へと出てくるというのは、飢えていた金花の食欲の表れであろう。また、「丸焼きの雉なぞが羽搏きをして」「舞ひ上つてしまふ」というのは、一度飢えた経験をしたため、たとえご馳走が溢れるように現われても、いずれは無くなるだろうという恐怖の表れと考えられる。

そして夢が金花の心象風景であるもう一つ証拠として、次の引用がある。

彼女の椅子の後には、絳紗の帷を垂れた窓があつて、その又窓の外には川があるのか、静な水の音や櫂の音が、絶えず此処まで聞えて来た。それがどうも彼女には、幼少の時から見慣れてゐる、秦淮らしい心もちがした。しかし彼女が今ゐる所は、確に天国の町にある、基督の家に違ひなかつた。

金花の夢の中の光景は見慣れている秦淮のものであるにもかかわらず、金花はそれを「天国の町にある、基督の家」と断定した。言い換えれば、この夢は金花の意思を表したものである。

金花は餓死だけでなく、病死の恐怖にもさらされていた。この二つの恐怖の根源は病気である。病気が治れば、すべてが解決できる。夢に見た男について、左のように語られる。

金花はその男を一目見ると、それが今夜彼女の部屋へ、泊りに来た男だと云ふ事がわかつた。が、唯一つ彼と違ふ事には、丁度三日月のやうな光の環が、この外国人の頭の上、一尺ばかりの空に懸つてゐた。

現れた男が泊りに来た男と承知しているが、光の環が頭の上にかかっており、基督のようである。勿論夢の内容はよく現実離れをしている。この夢において、金花は外国人の客を救助しにきた基督だと認識した。そして夢の中で、この「南京の基督」は金花に次のように話した。

「まあ、お前だけお食べ。それを食べるとお前の病気が、今夜の内によくなるから。」

病気がよくなるというのは金花の願望そのものである。語り手は金

花の夢を語ることによって金花の欲望を表している。

そして夢から目が覚めた後、金花は「もしあの人に病気でも移したら、――」と現実を認識した。先述した通り、金花は他の売笑婦から病気を客に移せば治るという方法を聞いた。病気を客に移すことは金花の信仰に反することである。かつて絶対にしないと誓った金花は「急に心が暗くなつて、今朝は再彼の顔を見るに堪へないやうな心もちがした」と罪悪感に苦しんだ。そして客の姿が見えないと、金花はすぐに「ではあれも夢だつたかしら」と罪悪感から逃れようとした。しかし部屋の中を見回すとそれは現実だと知る。そうするとまたも罪悪感に苦しむことになる。その時「金花はこの瞬間、彼女の体に起つた奇蹟が、一夜の中に跡方もなく、悪性を極めた楊梅瘡を癒した事に気づいたのであつた」。そこで金花が出した結論はやはり客に移したというのではなく、「ではあの人が基督様だつたのだ」である。一度客に病気を移したという罪悪感から逃れようとして逃れなかった金花は、ただ無知の故に外国人客を基督にするのではなく、そうすることによって、客に病気を移したという罪悪感から逃れようとしたのである。

この展開がメルヘンでない証拠として、芥川自身が次のように説明している。

金花の梅毒が治る事は今日の科学では可能だ唯根治ではない外面的徴候は第一期から第二期へ第二期から第三期へ進む間に消滅するつまり間歇的に平人同様となるのだいくら君が治るものかと頑張つても治るのだから仕方がない[4]

芥川によれば、金花の病気が治ったのは一時病状が治まるに過ぎず、あくまで金花の誤認識である。

第二章では、夢を通して、金花の治癒への強い願望があらわにされた。それがあるからこそ、外国人の客をついに泊めたのであろう。そして、目が覚めた後、金花は病が治ったと勘違いし、罪悪感から逃れようと、外国人の客を基督だとした。

第一章と第二章において、語り手の意識的な語りによって、金花と共犯の関係を結んでいる。従って、金花は無知で客を基督だと信じ込む愚人ではなく、病気を治すため、無意識でも客を取ってしまい、そしてカトリック教徒としての罪悪感から逃れようと、客を基督だとした。ここまで作品が完結したら、人間は追い込まれると、たとえ固い信仰を持っていても、自分のために行動するのだということが読み取れる。テーマは人間のエゴとなるであろう。しかし、第三章が続いていく。それによって作品のテーマはどのように変わるだろうか。

三

第三章においては若い日本の旅行家が再び訪れることが語られる。一回目の訪問と同じように、若い日本の旅行家は「まだ十字架がかけてあるぢやないか」と再び金花の信仰を軽蔑してしまった。すると、金花はまたもや自己弁護をするために、その夜の話を聞かせた。勿論、金花の視点から外国人の客を南京の基督として語っただろう。若い日本の旅行家は一回目と同じように金花の話を信じてしまった。彼はその外国人の正体を知っている。そこで、優位にたって、「蒙

を啓いてやるべき」か否かを考え出す。しかし、金花は外国人の客の職業こそ知らないが、若い日本の旅行家が知っている「男振りに似合はない、人の悪るさうな人間」で、「南京の私窩子を一晩買つて、その女がすやすや眠つてゐる間に、そつと逃げて来た」ことは承知していたと言える。語り手も同じことを知っている。従って、若い日本の旅行家は上から目線で金花を見ているが、実は金花に振り回されている男である。語り手は金花に同調して、若い日本の旅行家が翻弄された様子を語ったのである。

作品の結末は開放している。

金花の話が終つた時、彼は思ひ出したやうに燐寸を擦つて、匂の高い葉巻をふかし出した。さうしてわざと熱心さうに、こんな窮した質問をした。

「さうかい。それは不思議だな。だが、――だがお前は、その後一度も煩はないかい。」

「ええ、一度も。」

金花は西瓜の種を噛りながら、晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらはずに返事をした。

若い日本の旅行家は金花に病気が治ったかどうかと聞いた。金花は治ったと「晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらはずに返事をした」。作品はここまでとなるが、これまで若い日本の旅行家が二度も金花の話を信じていたことによれば、また金花は完治したと信じるであろう。一夜ともにすることが予想される。しかし、梅毒は人に移せば治るというのは語り手も指摘した通り、「迷信じみた療法」であり、金花は全快するはずがない。事実、芥川自身も証言するように、あれは症状が一時しずまるに過ぎない。すると、若い日本の旅行家もあの外国人の客と同じように、ひどい目に遭う可能性が高い。

ともかく、第三章では、若い日本の旅行家は金花を揶揄しようとするが、逆に翻弄される羽目になったことが語られている。特に「蒙を啓いてやる」から、若い日本の旅行家は自分と金花とを開明と蒙昧との図式に見立てていることが分かる。若い日本の旅行家のような近代知識人が蒙昧の南京の娼婦に翻弄されることが語られ、近代知識人が揶揄されるのが、作品のテーマである。

おわりに

以上、作品の分析を行った。本作は先行論における若い日本の旅行家が〈神聖なる愚人〉である金花に蒙を開くか否かの話ではなく、カトリック教徒である金花は、梅毒を治すため外国人の客を接待し、さらに基督の降臨だと思い込み、若い日本の旅行家は彼女の嘘を見破れず、「蒙を啓いてやる」という優位な立場に立ったが、実は金花に翻弄されてしまった話である。先述した通り、若い日本の旅行家に代表される近代知識人が揶揄される作品である。

また、作品の方法に注目すれば、芥川の得意な語り手を顕在化させる方法が本作にも使用されている。語り手は読者と対峙する形で、視点を変えたり、語る内容をアレンジしたりして、百パーセント語るのではなく、読者に話の真相を探らせようとしている。そういう意味で本論は語り手が残した手がかりによって構成された一つの読

みに過ぎない。この語りの方法が使用されることで、作品が読者にとって吟味に値する一作となったのである。

注

（1）関口安義『芥川龍之介新論』翰林書房、平14・5、130頁

（2）陳論霖「芥川龍之介「南京の基督」にみる「怪奇」―〈奇蹟〉と〈迷信〉をめぐる問題系―」（『アジア社会文化研究』13号、平24・3、131頁）

（3）谷崎潤一郎「秦淮の夜」（「中外」大8・2、「新小説」大8・3、原題「南京奇望街」）

（4）芥川龍之介「書簡」（南部修太郎宛、大9・7）

【附記】作品の引用は初出に拠り、漢字の字体は通用字体に改めた。